

カントのロック批判～先験的対象と実体の議論を巡って

稲垣 恵 一

1 はじめに

近代哲学の大きな問題の一つに観念説の問題がある。観念説の問題とは、われわれが直接に達しうるものは観念のみであって、その背後にある物に達することはできない、という問題である。この問題が問題たる所以は、われわれが物に達することができない以上、観念と物とを一致させることが不可能になり、真なる認識を持つことができなくなるということにある。この問題は、哲学史的常識においては、デカルトに始まり、ロック、バークリ、ヒュームと解決策が講じられるが、いずれも失敗に終わった、とされている。そして、カントの経験説もまたそうした哲学史的常識にもとづいて解釈されてきた。例えば、その代表者としてヘンリー・アリスンがいる。アリスンは、カントの経験説をロックの観念説の再解釈として捉え、カントの経験説にとって軽視されてはならない「先験的対象」の概念をロックの「実体」と重ね合わせにした。

本稿の意図は、カントのロック解釈（批判）を明らかにすることを通じて、カントの批判哲学の立場を明らかにすることにある。そのためにまず初めに、哲学史的常識の立場に立って先験的対象を解釈したアリスン説を概観する。その次に、アリスン説の問題を指摘し、カントの先験的対象概念がロックの実体概念と重ね合わせにされないことを確認する。最後に、それを踏まえてカントのロック批判の検討を通じて、カントの批判哲学の立場が明らかにされる。

2 H.E.アリスンの「先験的対象」解釈

まずはじめに先験的対象の問題を取り扱うに先立って、H.E.アリスンの「先験的対象」解釈を見ておきたい。というのは、アリスンは先験的対象の問題の取り扱いを解釈史的にまとめ、さらに先験的対象の問題をロックの実体を巡る問題と重ね合わせにしているからである。それ故、アリスンの解釈を概観することは、カントとロックの哲学的立場を明らかにするための手がかりになるのである。

さて、アリスンは「カントの先験的対象の概念」(Kant's Concept of transcendental Object)という論文の中で、現代までに至る先験的対象を巡る議論を三つの立場に区分している⁽¹⁾。第一に、先験的対象を物自体と同一視する立場。第二に、先験的対象を物自体と区別する立場。第三の立場は、先験的対象をコンテクストに応じて「物自体と同一の先験的対象」と「物自体と峻別されるべき先験的対象」と区別する立場である。そして、ア

アリスンは第三の立場に立つ、なぜアリスンがこの立場に立ったのか。アリスンは第一の立場を『純粹理性批判』を前批判期の残滓と批判期の円熟した思考の合体物と見なすことを根拠としている、と考えるからである。そして、アリスンが第二の立場に立つことができないのは、第二の立場を採る人たちがカントが「先験的対象」という術語を不注意に用いているということを論拠としているからである。つまり、第一の立場も、第二の立場も哲学的根拠にもとづいて「先験的対象」を解釈することを放棄しており、哲学的根拠にもとづいて先験的対象を解釈しうるならば、その方が『純粹理性批判』の趣旨を正当に理解しうる、とアリスンは考えているのである。

それでは、アリスンの哲学的な根拠とは一体、何か。その前にまず確認しておかなければならないことは、アリスンの先験的対象解釈、いや、カントの経験説解釈の根本的立場である。それは、「カントの認識説は観念説の再解釈である」という立場である。ここで言われている観念説とはいわゆる、近代哲学史の常識として言われている観念説（カントの言葉を借りれば、経験的観念論）のことに他ならない。つまり、「われわれは直接にわれわれ自身の観念と意識状態のみを意識しているにすぎず、これらの観念に対応する外的な対象の現実存在は、直接的な把握の問題と言うよりむしろ因果的な推論の問題である」⁽²⁾という観念説である。この観念説を採るならば、われわれは外的な対象にたんに間接的に達するのみならず、外的な対象に確実に達することも不可能になろう。なぜなら、われわれの観念から推論によって外的対象に到達したとしても、われわれはその当の外的対象には観念によって達することはできないのであるから、そうした推論は不確実とならざるをえないからである。そうすることによって、われわれは決して真なる認識を持つことができないという懐疑論に陥らざるをえない。カントが対決を試みた経験的観念論を採る哲学者はデカルトとロックであるとアリスンは考えている⁽³⁾。さらに、アリスンは、この議論を英国古典経験論全般にまで広げ、ロックの観念論の綻びである実体という外的対象を放棄し、それらを単なる「観念の集合体」や「印象の集積」に還元するバークリやヒュームをもカントの対決者と見なしている⁽⁴⁾。このことは、アリスンによれば、カントの先験的観念論がデカルト・ロック流の（バークリ・ヒュームも含む）経験的観念論を回避する方法であることを意味する。

それでは、アリスンによるカントの経験説解釈を具体的に概観して見ることにしたい。デカルトやロックと同じようにわれわれが達しうるものは観念（表象）のみである。しかし、デカルトやロックの場合は、外的対象は観念から隔てられたものであったが、カントにおいてはそうではない。カントの場合、空間・時間という直観の形式のうちにある対象はすべて直接的であり、その対象の現実存在を疑うことはできない。つまり、カントにとって外的な対象とは、空間のうちにあるものを意味し、内的な対象とは時間のうちにあるものを意味するのである。それ故、デカルトとロックは空間と時間のうちにある対象がわれわれにとって直接的で疑いえないものであるという先験的観念論の立場に立たずに、感覚・知覚という直接的所与（例えば、「赤さ」「芳香」等）からそれに対応する対象（例えば、薔薇そのもの）へと推論したがために、「内的-外的」の意味を誤解したのである。そ

れに対して、カントの先験的観念論の立場は、空間と時間を直接的な表象と見なすということにおいて成立している。表象が主観の自由意志によって創造されたものではない以上、それを生み出した原因を持たなくてはならない。それが「物自体」「先験的対象」と呼ばれる実在である。そうした対象が知られるのは、われわれが批判哲学の立場に立つからこそである。この意味での「物自体」「先験的対象」はデカルトとロックが感覚・知覚からそれに対応する対象へと推論したのと同じ仕方では知られる対象である。そして、この「物自体」「先験的対象」があるからこそ、われわれの認識の対象は可能的経験以外にないと言えることが可能になる。アリスンは、これはカントが近代の観念説の難問から解放されていないことを意味する、と断定する。しかし、だからといってアリスンは「先験的対象」が持つ重要な意味を取り逃していない。すなわち「先験的対象」が先験的統覚の相関者という意味を持つことを捉えている。カントにおいてもデカルトやロックと同じくわれわれは表象に達するのみである。それ故、表象とそれに対応する対象（先験的対象）とを比較して、認識の成立を説明することは到底できない。従って、アリスンは表象とそれに対応する対象の関係、換言すれば、表象と先験的対象との関係を表象間の必然的關係へと還元する。このことは、真理の対応説の言葉遣いによって真理の整合説を説明することを意味する。それ故、先験的対象は真理の整合説を説明するための予備的概念であり、統覚の統一によって経験を説明するための概念にすぎない。

以上のアリスン説の概観からアリスン説の哲学的立場が明らかになる。すなわち、カントの先験的観念論はわれわれが表象にのみ達するという観念論であり、それに対応する対象を認識の成立において用いずに、表象の範囲内で認識を説明するという、首尾一貫した立場である。しかしながら、このアリスンの立場には次の大きな問題があることを認めざるをえないように思われる。つまり、カントの先験的対象の役割とロックの実体の役割をそのまま同一視しうるのか、と。アリスンは、観念からそれに対応する対象へと推論によって到達するという方法が、カントの先験的対象についても見られるということからカントの先験的対象の役割をロックの実体の役割と同一視する。しかし、推論方法の同一性を論拠として、ロックの問題設定とカントの問題設定を即座に同一視することはできない。むしろ、両者がどういった問題設定で実体や先験的対象について論られていたのかを検討すべきであろう。

3 アリスン説の問題

前章で確認したように、アリスンはカントが先験的観念論の立場を取るということにもとづいて、先験的対象の解釈を試みた。さらに、カントの先験的観念論が表象に対応する不可知な対象を想定せざるをえないという点において、デカルトやロックの経験的観念論と同じ難問を持つとアリスンは考えた。しかし、果たしてデカルトやロックの経験的観念論とカントの先験的観念論の問題を同一線上に置くことができるのであろうか。その問題を解決するためには、カントが先験的対象の概念をいかなる問題構制において用いている

のかを考察せねばなるまい。

カントが「先験的对象」「先験的客観」「あるもの=X」という概念を用いる局面は、3つある。それは、人間の認識能力である「感性」「悟性」「理性」である。そして、先験的对象は(1)感性においてはわれわれを触発する対象であり、(2)悟性においては統覚の相関者であり、(3)理性においては理念に対応するわれわれに世界の体系的統一を与える虚焦点である。

(1)感性における先験的对象は、触発する対象であり、現象の根拠である。現象はわれわれに直接に与えられる対象である。それ故、この場合、経験的観念論におけるようにまずはじめに物が実在し、その物がわれわれのうちに観念を生み出すのとは異なっている。なぜなら、経験的観念論の場合は、観念は感覚を介在して得られる間接的なものになるからである。むしろ、カントの場合、空間・時間のうちにある物(現象)は経験的観念論のように観念を生み出したものを持ち出さなくとも、それだけで実在性が保証されている。しかし、現象がわれわれに直接に与えられたと言っても、それはわれわれが自由意志によって創造したものではない。それ故、現象の背後に現象ではない対象(先験的对象)をわれわれを触発する対象として想定しなくてはならない。⁽⁵⁾

この場合の先験的对象は、現象が現象として成立するための根拠であって、経験的観念論の場合のように観念に対応する実在的な物ではない。むしろ、先験的对象は、現象を可能にする概念として規定されている。それ故、経験的観念論においては経験的真理の成立において観念に対応する対象をいかにして把握するのが大きな問題となるが、カントの場合には、経験的真理の過程において先験的对象は全く関わらない。

(2)悟性における先験的对象は統覚の相関者である。この意味の先験的对象は、アリストが述べているように、真理の整合説を真理の対応説の言葉で説明する概念の側面を持つ。カントにおいて経験の成立は、現象を統覚によって総合的に統一することを意味する。それ故、現象が予め先験的統一を持っているのではなく、むしろ統覚が現象に対して統一を付与することになる。それ故、現象とそれに対応する対象を一致させることによって経験が成立するという経験的観念論の問題設定はここにはない。⁽⁶⁾それならば、先験的对象はいかなる意味を持つのか。そもそも先験的对象は表象(現象)の対象という意味を持つ。それ故、「表象の対象は何か」という問いが問われた場合に初めて、先験的对象は表象を必然的に強制するものという意味を持つ。⁽⁷⁾しかし、われわれは表象としての現象にのみ達するにすぎないのであるから、先験的对象に達することはできない。経験とはそもそも、現象を統覚によって総合的に統一することを意味する。それ故、これまで表象に対応する対象と言われていた対象(先験的对象)は、われわれの経験的認識を強制する概念として規定され、経験的認識の先験的对象への関係は、統覚の統一の制約のもとに立たされることによって現象と統覚の統一との関係として説明される。この先験的对象は、現象の現実存在の根拠という意味を孕みつつ、統覚を現象へ志向させるという役割を持ち、経験的認識に客観的実在性を供給するのである。

この場合の先験的对象もまた、現象からそれに対応する対象へと遡源する問いに対して、

表象としての現象を統一する根拠であり、統覚の統一を説明する概念として規定されている。

(3) 理性における先験的対象は、理念に対応する対象であり、世界の体系的統一の根拠という意味を持っている。世界の体系的統一とは、世界の諸現象についての諸々の認識を一つの原理の下に統一すること、換言すれば、一つの最高原因にもとづいて諸々の認識を説明することを意味する。ところで、そもそも現象が実在的な物として思考されるためには、すべての物の可能性となる質料が包括的にわれわれに与えられなければならない。なぜなら、そうした質料がなければ、われわれは現象を無秩序な物と見なすほかなくなり、認識が成立しなくなるからである。そして、実際にわれわれの認識は成立しているのだから、そうした質料を認めざるをえないのである。このようにして、われわれは現象にのみ適用されうる悟性の原則を拡張使用して、現象の可能性となる包括的な質料、つまり、現象の最高原因を実体化する。しかし、われわれが達しうる領域は現象界のみである。このことが知られるとき、われわれは現象界に限界づけられ、現象の最高原因はわれわれには到達しえない対象として規定される。そして、われわれの悟性は、最高原因を現象の範囲内で探求するように強制される。これが理性の統制的原理である。従って、われわれは諸認識を体系的に統一する場合、理念に対応する対象が諸認識のうちにあるかのように見なし、諸現象を体系的に統一する。しかし、この統一は常に相対的統一にとどまり、理念(絶対的統一)に対応する対象は虚焦点として規定される。なぜなら、実際にはそうした理念に対応する対象を現象やその認識のうちに見出すことはできないからである。

ここで理念に対応する対象は先験的対象であるが、上述の先験的対象もまた、(1)(2)の先験的対象と同じく、現象(現象についての諸認識)からそれに対応する対象へと遡源する問いに対して現象を体系的に統一する根拠として説明され、われわれには現象に達するにすぎないということが知られると同時に、先験的対象は現象の総体を可能にする根拠ではあるがわれわれが到達しえない根拠として、現象の背後に想定される。そして、このことが理念の統制的使用を説明している。

以上、(1)(2)(3)において先験的対象の概念の意味をごく簡単にまとめたが、ここで最も注意しなくてはならないことは、現象・現象についての諸認識からそれに対応する対象が問われている点である。その対象は(1)においては現象の現実存在の根拠として規定され、(2)においては「統覚の統一の相関者」(3)においては「理念に対応し現象の総括を可能にする根拠」として説明される。そして、先験的対象はそれぞれの局面において別様に語られているけれども、いずれも現象を根拠づけるものとして語られていることに注意しなくてはならない。このことは、先験的対象が認識能力の各局面に別様の仕方機能しているというより、むしろ、同一の事態の別表現と考えられなければならない。こうしたことから、先験的対象の概念は、現象という概念が矛盾しないように、まさしく概念として想定されるものなのである。それ故、カントの先験哲学の基礎となる概念なのである。たしかに先験的対象は、経験的観念論の対象と同じように推論によって到達されるものではある。しかし、この概念が経験的観念論の対象と異なるのは、それがわれわれ

の経験の対象ではなく、むしろわれわれの経験の対象つまり現象を可能にする概念であるという点である。この概念があらゆる対象からわれわれにとっての対象を現象に確定することを可能にしている以上、われわれは経験的観念論におけるように認識の発生（プロセス）をカントの先験哲学に読み込む余地は全くなく、むしろ、現象の存立の説明を読み取らなければなるまい。

以上のことから、経験的観念論の問題とカントの先験的観念論の問題は同一線上におかれるべきではないことが明らかになった。デカルトやロックの経験的観念論がカントの先験的観念論と哲学的に連続している、とアリスンが考えていたことは前章で明らかにされた通りである。しかし、経験的観念論と先験的観念論が同一線上におかれるべきでないことが明らかになった以上、経験的観念論の克服としてカントの先験的観念論を解釈することは試みとしては面白いものではあるが、哲学的な根拠を持つものとは言い難いと思われる。その根拠として、カントがロックの経験説をいかなるものとして解釈し、また、批判していたのかを検討する必要がある。

4 カントのロック批判

『純粋理性批判』にはロックについての言及が、6箇所ある。それを見てみることにしたい。

引用1 「現代においては、たしかに一度は（有名なロックの）人間知性のある種の自然学によってこれらのあらゆる争いが終結され、形而上学の合法性が十分に決定されるように思われた。」(A IX)

引用2 「個別的な知覚から普遍的概念へと高まるために、われわれの認識能力の最初の努力を追求することがきわめて有効であることは疑いない。そして、ロックがそのための道を拓いたことに感謝しなくてはならない。しかしながら、ア・プリオリな純粋概念の演繹は、ロックの道によっては達成できない。というのは、ア・プリオリな純粋概念はこの道にはまったく見出だされないからである。なぜなら、ア・プリオリな純粋概念が将来使用される場合、その使用は経験からまったく独立であるべきだから、純粋概念は経験からの起源とはまったく別の出生証明証を示さなければならないからである。このロックによって試みられた自然学的な導出は、本来的に演繹と呼ぶことはできない。〔省略〕それ故、純粋概念については先験的演繹のみがありえて、経験的演繹は決してありえず、経験的演繹はア・プリオリな純粋悟性概念に関しては虚しい試み以外の何ものでもないし、そうした試みに携わる人が、こうした認識に関する独自の本性を理解していないことは明らかである。」(A86, 87/B119)

引用3 「有名なロックは、こうした考察〔カテゴリーの演繹論〕を欠き、経験のうちに悟性の純粋概念を見出だしたために、それをまた経験から導いた。そして、この概念によ

ってあらゆる経験の限界を越えた認識への試みを敢えて行うという不条理な仕方に陥ったのである。」(B127)

引用4 「この有名な二人〔ロックとヒューム〕のうち、前者〔ロック〕は熱狂的迷妄に門戸を開いた。なぜなら、理性は一旦、自分の側に権限があると認められると、もはや節制という曖昧な褒め言葉によって抑制されることはないからである。」(B128)

引用5 「ライプニッツが現象を知性化したのは、ロックが悟性概念全体を（こうした表現を使うことが私に許されるのなら）精神発生論〔Noogonie〕の体系に則って感性化したのと同様なのである。別言すれば、ロックは悟性概念を経験的概念あるいは抽象的反省概念以外の何ものでもないと主張したのである。」(A271/B327)

引用6 「アリストテレスは経験論者の第一人者と見なされ、プラトンは知性論者の第一人者と見なされる。現代においては、ロックがアリストテレスに従い、ライプニッツがプラトン（もっともプラトンの神秘的体系からは十分にかけ離れているけれども）に従っている。それにも関わらず、両者はこの争いにいかなる裁決も下すことができなかった。」(A854/B882)

以上の6つの引用に共通することは、いずれもロックが純粋悟性概念を経験から導いたことに対する批判である、という点である。カントによれば、カテゴリーはア・プリオリであって、決して経験に起源を持つものではない。それ故、カテゴリーが現象に対して適用されるためには、現象に対してカテゴリーがいかにして適用されうるのかが問われなくてはならないのである。これこそが、先験的演繹論の意図である。そもそも純粋悟性概念はア・プリオリな概念であり、それが経験の成立に不可欠である限り先験的演繹論を必要とする。ところが、ロックは、経験、換言すれば観念から出発し、観念を分析することによって純粋悟性概念を導出した。そのような仕方では純粋悟性概念を導出すれば、純粋悟性概念を経験一般に適用することは到底不可能になり、せいぜいのところ、過去の経験について適用が許されるにすぎないことになる。カントが、ロックを批判している点は、まさしくこの点なのである。

カントがロックを批判している点は、観念説を採用すると、観念の背後にある實在に到達することが不可能になり、経験的真理が成立しなくなるということではない。むしろ、カントは、引用2に見られるように、個別的知覚から普遍的概念へと高まるという実験的方法をロックのうちに十分に認め、その上で、経験を可能にするはずの純粋悟性概念が経験から導き出された点を批判しているのである。このことは、経験的観念者のうちにデカルトとパークリは含まれるが、ロックは除外されていることを意味する。それ故、ロックの経験説とカントの経験説を殊更に結びつけるアリスンの試みは誤りであるというほかない。しかし、アリスンは次のように反論するかもしれない。近代の観念説の問題はすでに

ロックの存命中に問題となっていたにも関わらず⁽⁸⁾、カントは『人間知性論』の問題、つまり観念説の問題をまったく誤解していたのか、と。そうではあるまい。むしろ、カントは、ロックの哲学的意義が観念説の問題にあるのではなく、実験的方法の問題にあることを認めていたのである。その意味では、ロックが存命していた当時の哲学者以上にロックの哲学的意義を認めていたというべきであろう。それ故われわれは、ロックと同時代の哲学者がロックの哲学的意義を誤解していたのであって、カントはロックの哲学的問題を十分に理解していたと、アリスンに対して反論せねばなるまい。

それでは、カントとロックの立場の相違はどこにあるのか。それは、経験の捉え方である。ロックにとっての哲学的問いは、個別的知覚からいかにして普遍的概念を構成するのか、という問題である。ロックの言葉を借りれば、単純観念を複雑観念へいかにして高めていくのか、という問題である。この問題は、近代の実験科学における個別的データからいかにして複雑な知識が構成されていくのか、という問題に対応している。⁽⁹⁾ それに対してカントは、ロックのような哲学的な問題を問うまでもない大前提として認めている。つまり、個別的知覚なくして、普遍的な知識が構成されないということを認めている。カントの問題はそうした個別的な知覚があっても、それを知識として高める手段である概念がなくては経験的知識は成立しないのではないか、という問題である。しかも、概念は経験一般（知覚一般）を取り扱うのであるから、概念は経験から導かれてはならないのである。それ故、カントが「先験的演繹論」で取り扱おうとした問題は、ア・プリオリな概念が経験一般をいかにして可能にするのか、という問題となる。そして、概念はア・プリオリである以上、経験（現象）に対していかにして適用されるか、という問いが主題化されることになる。ロックは普遍的知識がいかなるプロセスを通じて成立したのかを問うた。それに対し、カントは、その当の経験一般がいかにして成立するのか、という問題を論じているのである。カントが『純粋理性批判』を通じて主張していることは、われわれ人間にとっての「経験」とは、いったい何であり、しかも、いかなる条件・制約が人間の認識を成立させているのか、そして、いかにしてその条件・制約が経験を可能にしているのか、という問いに他ならないのである。⁽¹⁰⁾

5 むすび

カントの先験的観念論は、個別的知覚から普遍的概念へといかにして認識を高めていくかという観念論ではなく、そうした方法それ自体がいかなる条件・制約のもとで成立し、しかも、その条件・制約がいかにして成立するのかを論ずるための大前提である。先験的観念論とは、対象が時間・空間というわれわれの直観形式のうちに直接に与えられるという観念論である。この観念論においては、概念は現象とは異種的であるため、概念の適用可能性が論じられなければならない。そして、「先験的演繹論」でこの概念の適用可能性が現象つまり可能的経験に制限され、「先験的原則論」で実体の原則や因果律等の可能性が示される。そうすることによってわれわれの経験の範囲がカテゴリーが現象に適用される規

則の範囲内に限定される。これこそが、カントが哲学的に問題としたことである。それ故、ロックの哲学的手法に固執する限り、カントが提起した問題は解決されない。そして、一連のカントのロック批判もこの問題を巡ってなされているのである。それ故、先験的観念論の立場を採用する限り、先験的对象も経験の制約を構成する要素と見なさなくてはならず、ロックの実体や観念の背後にある不可知の實在と見なすことは許されまい。

最後に、カントの先験的对象をロックの実体から断ち切ることによって得られる洞察、言い換えれば、先験的観念論を経験的観念論から断ち切ることによって得られる洞察を挙げておきたい。

第一に、先験的对象が先験的観念論の枠組みに不可欠なもの、つまり、現象、統覚の統一、認識の体系的統一という概念が意味を持つために必要とされるものになり、直接には、認識の成立の局面には不必要となる。しかも、従来のように、実体のカテゴリーや統覚の統一を被っていない現象と先験的对象を同一視しなくともよくなる。

第二に、個別的経験から普遍概念へと認識を高めるというロック的な手法は、実験の場面において成立していることが明らかになる。一方、カントの批判哲学が重視する点は、経験(実験)に先だって概念が確実でなければならない、ということである。つまり、ア・プリオリな概念、例えば「実体」の概念から「力」といった概念を導出し、理論体系を予め立てた上で、初めて実験が可能になるが、その「実体」の概念は、経験に左右されるものではなく確実でなければならない。⁽¹⁾そして、『自然科学の形而上学的原理』においてこれらの諸概念は自然科学において前提され、それらが物質の本質規定に関わるものとして主題化される。

第三に、近代哲学の観念説の問題を回避できる。近代の観念説の問題は、懐疑論をいかにして回避するのかという問題であった。先験的对象が近代の観念説(経験的観念論)における観念の背後にある實在と同一視されないことによって、人間の認識は形而上学的レベルの懐疑論から解放され、当時の自然科学の確実な歩みと背反しないことになるのである。

註

カントの著作からの引用はアカデミー版カント全集にもとづき、『純粹理性批判』第一版をA、第二版をBと記し、ページ数をアラビア数字で示している。

(1) Vgl. H.E.Allison, *Kant's concept of the transcendental object* (Kant-Studien, Bd. 59, 1972) S.165.アリスンの立場は、先験的对象と物自体をコンテキストに応じて区別すべきだという第三の立場であるが、著者はこの立場に立たない。むしろ、第一の立場に立つ。ただしアリスンが批判しているコーヘンやケンプ・スミスと同じ論拠でこの立場に立つのではない。これについては、拙稿「先験的对象と物自体」(『中部哲学会年報』第30号 1998年) pp.17-30 参照。

(2) Allison, a.a.O., S.168.

(3) アリスンはデカルトとロックを経験的観念論者と見なしているが、実際にカントが経験的

- 観念論者と見なしているのはデカルトとパークリである。そして、デカルトの観念論は蓋然的観念論と呼ばれ、パークリの観念論は独断的観念論と呼ばれている。Vgl.B274(4)
- カントは、パークリを経験的観念論者と見なしているが、ヒュームを経験的観念論者とは見なしていない。カントがヒュームを専ら批判する点は、因果律を習慣に基づくことと見なすことによって「経験」と「夢」の原理的区別がなくなってしまう、という点である。
- (5) カントの現象と物自体の関係に知覚の因果説を読み込むことはできない。なぜなら、カントは現象と物自体を経験の時間的発生(Entstehung)の問題として語っているのではなく、むしろ存立(Bestehung)の問題として語っているからである。カントは次のように述べている。

「なぜなら、感性的直観はあらゆるものに無差別に関係するのではなく、むしろ他の対象に場を残すがゆえに、そうした対象は端的に否定されない。しかし、その特定の概念を欠いているので(いかなるカテゴリーもそうした対象を理解するのに役立たない)、われわれの悟性の対象として主張されずしえないのである。

従って、悟性は感性を限界づけ、その領域を拡張しないようにする。そして、悟性は感性が物自体そのものに関係するという僭越を犯さずに、むしろ単に現象にのみ関係するように警告し、悟性は対象それ自体を思考する。しかし、その対象を現象の原因である(それ故現象ならざる)先験的客観としてのみ思考するのである。」(A288,344)

これらの引用をみる限り、カントは物自体について「現象が現実存在する」ということを説明するために想定していることが分かる。感性は現象にのみ関係し、われわれは現象のみを受け取る。しかし、そのように語りうるためにはあらゆる対象から区別された「現象」について語らなければならない。それについて語るために、現象の背後にその根拠としての物自体(先験的对象)を想定したのである。これに対しては、先験的对象は不可知であるにもかかわらず、どうして物自体と区別されるのか、という反論を立てることができるかもしれない。しかし、これについても回答は可能である。なぜなら、現象が現象として知られる局面は、現象はわれわれの表象であるにもかかわらず、われわれが創造した物ではなく与えられた物であることに気付く局面だからである。この根源的事実に気付くときに初めて先験的对象を現象の根拠として想定することが可能になるのである。従って、現象が与えられる、現象を受け取るとは、現象の背後に現象の根拠としての先験的对象を想定することによってそれに対して受動的になることを意味するのである。

それ故、ここにはロックにおけるようにまず物体がわれわれを刺激して、それによって観念が生み出されるという発生の問題はなく、むしろ、現象から出発しその根拠を問うという存立の問題のみがある。しかも、この存立の問題においては、物自体から現象へ推論することはできない。だからといって、近代哲学史の実体と観念の問題に巻き込まれることはない。なぜなら、ここでは認識の発生の問題が語られているのではないからである。

- (6) (5)でも述べたように、カントの経験説の根本的立場は現象の存立を問うことにある。それ故、現象の発生を問うという認識論的な問題が入り込む余地はない。それに対して、ロックの経験説においてはまさしくこの発生が問題である。なぜなら、ロックが問題としていることは現代の自然科学で言えば、実験・観察におけるスキルの問題だからである。ロックの問題については、田村均「ジョン・ロックの自然科学の哲学」(『哲学』第47号 日本哲学会編) pp.207-216.参照。

- (7) この先験的対象をカントは、統覚の統一の相関者 (ein Correlatum der Einheit der Apperzeption) と呼ぶ。表象を強制するものは統覚であるにもかかわらず、先験的対象が表象を強制するとはどういう関係であるのか、と問われるかもしれない。ここでの局面を二つに区別する必要があると考える。つまり、概念によって表象を統一する局面と対象に受動的に関係する局面。前者は、いわゆる統覚の統一と言われるものであり、後者が統覚の統一の相関者である。われわれが経験するためには、現象を総合的に統一しなければならない。そして、現象を総合的に統一するためには予め先験的対象に対して受動的でなければならない。われわれが、先験的対象に対して受動的にならざるをえない以上、先験的対象はわれわれに対して認識を強制すると考えるほかない。そして、ここにこそたんなる表象が現象と区別され、しかもこの受動性が統覚を統一する局面においては必ず働いていなければならない。なぜなら、さもないとわれわれは単なる表象と戯れているにすぎないことになるからである。
- (8) ロックの同時代人の哲学者エドワード・スティリングフリートはロックに対して次のように反論している。

「単純観念は、それ自身を越える確実性の根拠をまったく与えない。」

「われわれは、思考、懷疑、思慮等といった力を持っていると、確実に知っている。しかし、貴殿〔ロック〕は、こうした知覚が物質からやって来るのか、非物質的な実体からやって来るのか、をわれわれは単純観念によって確実に知ることはできない、と語っている。というのは、物質は単純観念をわれわれに生み出すように洗練され、修正されているかもしれない、と貴殿は考えているのだから。ところで、わたしには次のことは奇妙に思われる。知性を持つ人間は、こうした単純観念をわれわれのあらゆる知識と確実性の基礎とする。それなのに、われわれは人間の出発点たる単純観念によっていかなる確実性にも達することができない。」

「われわれに刻みつけられている印象の真の原因についてわれわれは単純観念によって何も知ることはできないのに、こうした単純観念はいかにしてわれわれの知識と確実性の基礎であるのか。」

* いずれの引用も、Edward Stillingfleet, The Bishop of Worcester's Answer To Mr. Locke's Letter (1697), in 'Three Criticisms of Locke' (Georg Olms Verlag) 1987., p.22 ff.

ここでのスティリングフリートのロック批判の論点は、われわれは単純観念に達するのみであるから、単純観念を生み出した物質に到達することはできず、われわれの認識は不確実にならざるをえない、ということである。この批判は、まさしく近代哲学史の常識で言われているものと同一のものである。従って、この問題をカントが理解していなかったとは考えられない。なぜなら、カントは観念論論駁等でこの問題に正面から取り組んでいるからである。それ故、ロックを批判する際にカントがこの問題に触れていないということは、カント

は近代哲学史の常識で語られているようにはロックを理解していなかったことを意味すると考えざるをえない。もしもカントが近代哲学史の常識に従ってロックを理解していたとすれば、ロックはデカルトやパークリ以上に批判的になるであろう。なぜなら、ロックの外的対象はデカルトの場合のように神によって証明されずらしていないからである。

- (9) 田村均「ジョン・ロックの自然科学の哲学」(『哲学』第47号 日本哲学会編) p.212.参照.
- (10) ここでロックとカントどちらの立場に立つべきか、という問いが提起されるかもしれない。しかし、著者が見る限り、そもそもロックとカントの問題設定が異なっており、どちらの立場に立つべきか、という二者択一の問いを立てることそのものが困難であると思われる。
- (11) このことは、アリストテレス主義的スコラ学者がボイルの真空実験の意味を少しも理解できなかったような理論のアプリオリズムを意味するのではない。もしそのように解するならば、われわれは特定の科学理論に拘束されて、そこから知識の進歩を望むべくもないだろう。むしろ、カントのアプリオリズムは、特定の科学的知識から独立である、と考えられるべきで、現代の科学にもまったく相反するものではない。例えば、オトフリート・ヘッフェは、「(先験的)〈原則〉においてカントはユークリッド幾何学についても、ニュートンの運動法則についてもその真理を証明しようとしているのではない。彼は、法則を探求しこれを数学的に定式化することが一方的に自然研究者の意のままになるのではないということを主張したのだと思われる」と述べている。Vgl.オトフリート・ヘッフェ『イマヌエル・カント』薮木栄夫訳(法政大学出版局, 1991年, p.120.)

(名古屋大学大学院文学研究科・博士後期課程)